

〔大隈祭〕における講演活動〕

大隈重信と江藤新平・江藤新作

星 原 大 輔

はじめに

ただいまご紹介にあずかりました星原です。本日は大隈祭という素晴らしい場で話をする機会を与えていただきまして、本当にありがとうございます。この大隈記念館を初めて訪れたのは大学に進学した直後で、内部の展示を見学し、研修室で大隈に関するビデオを見たことを記憶しております。まさか自分が後年大隈の銅像を前で話すことになろうとは夢にも思いませんでした。私は大隈のように決して話が上手ではありませんし、ウエットに富んだ話もできません。みなさまにご満足いただけるかどうか、甚だ不安ですが、よろしくお願いいたします。

さて本日の演題を「大隈重信と江藤新平・江藤新作」とさせて頂きました。これまで江藤新平の研究に取り組んでまいりまして、その過程で江藤家の史料を色々と渉猟してきました。そして現在、早稲田大学大学史資料センターで

『大隈重信関係文書』の編纂事業に携わらせていただいています。こうした経緯もあって江藤家文書と大隈文書の両方を見てきたことで、個別に見るとわからなかった点と点がいくつか繋がって見えてきました。そこで本日は佐賀の七賢人の二人である大隈と江藤新平の交流と、そして新平の息子である新作との交流の一端をご紹介したいと思います。そこから大隈の実像が、何かしら浮かび上がればと考えています。

一、大隈重信と江藤新平

一 二人の経歴と人間関係

まずは大隈と江藤新平との関係ですが、江藤は天保五年（一八三四）ここから少し離れている八戸、現在、住宅街の中に案内が立っていますが、そこで生まれました。大隈は天保九年（一八三八）の生まれですので、江藤の方が四歳年長です。次に、二人の学歴を見てみると、弘道館内生寮に江藤は嘉永二年（一八四九）、大隈は嘉永六年（一八五三）に入り、そして蘭学寮に江藤は安政元年（一八五四）、大隈は安政三年（一八五六）に入っています。大隈は、江藤は「尊攘之論方に盛んなる時、泰西訳書を涉獵し」ていたと回顧しています。こうしてみると、二人はかなり近い修学歴を持っており、随分話が合ったのではないかと思えます。

では、同じ佐賀藩士であった二人の家庭環境は、どうであったのかというと、これは大きく異なっていました。大隈家は「上士」格で、物成一二〇石と分限帳に記されています。そちらの案内板にあるように、実質の知行は三〇〇石でした。一方、江藤家は「手明鎗」で、「安政六年物成」には切米七石と記されています。さらに新平の父助右衛門が問題を起こしたために藩の職を辞めさせられたこともあって、新平は幼少の頃から貧しい家庭環境にあったよう

です。しかし新平はそんな環境にめげることなく、「人智は空腹よりいずる」を口癖に、日々勉強に勤しんでいたと言われています。

ここまで家格が大きく異なる二人を結びつけたのは、副島種臣の実兄で、弘道館教授を務めていた枝吉神陽でした。二人とも神陽が主宰する義祭同盟に参加し、かつ神陽から古事記や令義解などの古典を教わりました。教わったと言っても、大隈は「先づ課するに古事記・令義解の謄写と暗記とを以てす」と語っていますから、今でいう、詰め込み教育であったようです。しかし大隈や江藤をはじめとする神陽の門下生にとつて、この時に蓄えた膨大な知識が、後々の活躍につながることとなったわけです。この義祭同盟に参加したメンバーが幕末時、公私にわたって交流していた様子は、国立国会図書館憲政資料室の大木喬任関係文書にある日記から知られます。

大隈と江藤の私的交流をうかがえる史料は数少ないのですが、新平が明治になって大隈に送った書翰をひとつだけ紹介します（早稲田大学大学史資料センター編『大隈重信関係文書』第二卷一九五―一九）。

先日より御母堂様御病之趣承知仕居、右者定而聊の事に而可有御坐存し居候処、昨日之御話に而者一時者余程御氣遣ひ被成候様之御事之趣、嗚々御心配被遊候事と奉存候。御見舞も不申上失敬不遇之奉存候。随而重の内かすてら五包進上之仕候。聊右御病氣御見舞之印迄に御坐候。

病気で倒れた大隈の母三井子にお見舞い品として「かすてら五包」を贈っています。当時のカステラは大変貴重であったのではないのでしょうか。懇切な言葉からも、江藤の温かい人柄と、二人の親密な関係がうかがえます。

明治になると、大隈は財政や殖産興業の分野に、江藤は教育や司法の分野にと、その活躍する場は異にしましたが、共に人のため国のためと活躍したのは、周知の通りです。それぞれの功績について話をするとき非常に長くなってしま

いますので、ここでは割愛させていただきます。しかしこの二人の関係を考える上で、どうしても避けて通れない問題があります。それは「佐賀の乱」です。

二 大隈重信と佐賀の乱

大隈にとつてもあまり思い出さたくない過去であつたのでしよう。大隈侯八十五年史編纂会編『大隈侯八十五年史』第一卷（大隈侯八十五年史編纂会、一九二六）には、「公人としては兎も角私情に於ては、深くその悲壮な末路を痛惜した。後年、君は当時の悲劇を想ひ出す毎に暗愁に打たれた」と記されています。というのも、大隈にとつては「佐賀の乱では江藤新平を筆頭に島義勇兄弟（中略）我輩の門下同様山中一郎、香月経五郎を始めとして一挙に二十余名」の知己を失い、かつ関係者の「其中には我輩の親類の者も」多くいたからです。

後年、大隈は「之（江藤新平）を失つたる国家は更に甚大なる損害であり、不幸であつた」と語る一方で（『大隈侯昔日譚』報知新聞社出版部、一九三二）、この佐賀の乱は「江藤先生の失敗」と表現しています。だからと言って、江藤の功績がすべて否定されるわけではありません。明治四四年（一九一三）四月一三日、東京の築地本願寺で行なわれた江藤新平追悼祭で、大隈は板垣退助と共に演壇に立ち、「成敗を以て人を論ず可らず、江藤新平氏は失敗せり、偉大なる歴史は百世の下に定まる」と発言しています。また大隈は佐賀の乱について「偶然ではない。即ち勢である」と述べています。江藤の本意ではなく、変動の著しい当時の政界、人間社会の複雑さを踏まえ、悲劇的な出来事であつたことを指摘しています。大隈はこれ以外にも、後で触れる新作が編纂した遺稿集『南白江藤新平遺稿』（吉川半七、一九〇〇）や、江藤の伝記である野半介編『江藤南白』（南白顕彰会、一九一四）にも序文を寄せ、先輩であつた江藤の顕彰に一役を買っています。

しかしこうした大隈の言動に対しては、様々な批判があります。よく伊藤痴遊の次のような文章が引用されます(伊藤痴遊『隠れたる事実明治裏面史』成光館出版部、一九二四)。

若し当時の政府に、侃々諤々の議を唱へて、大久保に反抗し得る者があつたならば、或は江藤の死を免れることが出来たかも知れない。然るに当時の在官者は、皆大久保の前に叩頭跪拝する連中ばかりで、一人の起つて、江藤の為に、其冤を訴へて呉れる者もなかつたのは、甚だ遺憾の至りである。今の隈など近頃になつて、頗に江藤の人物を推称し、其最後に同情した如きことを言ひ触らして、當時に於ける自分等の立場を弁疏して居るが、それは甚だ怪しからぬことだ。若し大隈が、今日唱ふる如き誠意を以て、江藤を見て居たのなら、何故あの際に江藤を救はなかつたのであるか、縦令力は久保に及ばずとも、此点に就て相当の力を尽くしたことが少しでもあるか、當時に於ては大久保の権力の前に跪拝して、何事も緘黙を守つて居り乍ら、四十年も経つた今日になつて、さも江藤の最期に同情したるが如きことを言ふて、世人を誤魔化さうとしても、当時の歴史を知つて居る者は、決してさういふ誤魔化しは許さぬ。

かなり痛烈な内容です。

では当時、大隈は江藤に対して何もしなかつたのでしょうか。『大隈侯八十五年史』には、江藤新平との最後の別れの様子が描かれています。江藤は離京する直前の一月二一日に大隈邸を訪れました。そこで大隈は一晚中かけて、「木乃伊取りが木乃伊になる」「飛んで火に入る夏の蟲」と帰郷を思いとどまるよう説得したのです。けれども江藤は、「大丈夫其様なへまな事はせぬ、如何考へても、この際自分が帰らなくては治まらぬ」と言つて、朝方に帰つてしまつたそうです。大隈は後日「あの時にもっと食い下がつていれば」と、さぞ後悔したことでしょう。

ところが大隈はこれとは少し違つて回顧談も残っています。大正元年(一九二二)九月二六日付の『読売新聞』朝刊に掲載された「江藤の人物と佐賀暴動の真相(下)」の一部に、次のようにあります。

実は江藤は帰国する時我輩の処へ暇乞に来たが、吾輩は危んで切に止めた。又我輩の妻は特に彼とは友人なのだから頼に引き止め、到頭其晩は無理矢理我輩の処に一泊させ、酒を汲んで談笑の間に帰国を思ひ止まらせ様としたが、其為江藤も我輩夫婦の好意に従ひ、帰国を思ひ止まったといつて帰つたから、左様とばかり思つて居たら、突然其翌日遂に帰国したのであつた。

これを紹介した書籍はないだろうと思つて揚々としていたのですが、片桐武男氏の新著『大樹 大隈重信』（佐賀新聞社、二〇二四）に全文が引用されていました。ただ解説などは施されていませんでしたので、『八十五年史』と異なる点を指摘しておきたいと思います。一つは、大隈の妻である綾子夫人が登場していることです。典拠が判らないのですが、綾子夫人は「江藤新平は大隈が寝ている時に家を立ち去つて、その後ろ姿が非常に寂しそうです」という言葉を残しているそうです。「我輩の妻は特に彼とは友人なのだから頼に引き止め」と大隈も語っているのですから、綾子夫人も江藤との最後の別れに関わっていたのでしょう。そしてもう一つは、江藤が「帰国を思ひ止まった」と言つて帰宅したとされていることです。大隈と綾子は江藤を「無理矢理」「一泊させ」て、酒を飲みながら二人がかりで説得し、ついに「思い止まった」と言つて帰つたわけですから、さぞかしほつとしたことでしょう。しかし江藤は佐賀へ発つてしまつたのです。したがつて江藤の死は、大隈だけではなく、綾子夫人も含めた大隈家全体にとって痛切な出来事であつたと言えるのではないのでしょうか。大隈も綾子夫人も、心のどこかに「あの時、新平を引き止めていれば」という思いを持ち続けたはずですよ。

ではこの佐賀の乱後、大隈や綾子夫人を含めた大隈家の人々が、江藤家とどのように交流し、そして佐賀とどういふ関係を構築していったのか。関係資料や新聞記事などを用いながら、少し考えてみたいと思います。

二、大隈重信と江藤熊太郎

一 明治一〇年代の佐賀における大隈の評価

明治九年の新聞紙上に、江藤新平の怨霊が大隈邸に出現し大騒ぎになっているという記事が掲載されているように（渡辺幾治郎『文書より観たる大隈重信侯』早稲田大学出版部、一九三三）、同時代の人々も大隈と佐賀の乱については何となくただならぬものを感じていたのでしょうか。

では佐賀の人たちは大隈をどう見ていたのでしょうか。極端な事例かもしれませんが、佐賀県立博物館に所蔵されている書翰を一つ取り上げてみたいと思います。差出人の諸岡正順は、七賢人の一人である副島種臣の甥で、かつ娘婿にあたる人物です。彼は明治一〇年代前半、東京から佐賀や長崎に度々やって来て演説を行ない、この辺りの自由民権運動にかなりの影響を与えたとされています。当時副島邸に寄宿していた諸岡は佐賀にいた両親に宛てた書翰の中で、「大隈佐野賊奸」「大木讒賊事」という表現を用いています（齋藤洋子「史料紹介 佐賀県立博物館所蔵「諸岡正順書翰」について」早稲田大学日本地域文化研究所編『伊勢の歴史と文化』行人社、二〇〇九）。諸岡の政治的立場も考慮しなければなりません。同郷の先輩に対してこのような蔑称を付けているところに、大隈たちへの視線がどのようなものであったのかが知られます。

では、江藤家の遺族はどうであったのでしょうか。新平が非業の最期を遂げた時、妻の千代は三〇歳でした。そして一四歳の熊太郎、一〇歳の松次郎、七歳の小三郎、二歳の用四郎の四人の男の子がいました。さらに千代のお腹の中には、赤ちゃんがいました。新平が亡くなって五か月後に生まれたこの女の子は、残念ながら、父親の顔を一度も

見ることはなかったのです。大黒柱である新平が突然、しかも国事犯という形で処罰されたわけですから、幼い子を連れた千代は途方に暮れたことでしょう。幸い、新平の弟である江藤源作が長崎で貿易商を営んでいたもので、遺族たちは彼を頼って長崎に移り、そして佐賀の丸目村、現在の西与賀に住むこととなりました。早稲田大学の教授を務められた木村時夫氏の『知られざる大隈重信』（集英社新書、二〇〇〇）に、ひ孫の江藤作平氏が登場します。早稲田高等学院の講義で、木村氏が江藤新平の話をした際に作平氏は大きな声で笑ったそうです。不思議に思って声をかけたら、「実は、自分はひ孫です」と答えられて驚いた、と。これをきっかけに交流が始まったらしいのですが、ある時、作平氏が「曾祖母は、私の小さい頃から、いつも大隈さんはひどい人だった、と言いつづけていました」と語ったというエピソードが記されています。新平死後の苦勞が、千代をこうした気持ちにもさせたのでしょうか。

二 大隈と江藤熊太郎

もう一人、長男の熊太郎のことにも触れておきたいと思います。彼はのちに上京して福沢諭吉が起こした慶応義塾に入り、佐賀県下の自由民権運動でも中心となって活躍しました。将来を非常に期待されていたのですが、残念ながら、明治一六年八月一日に二四歳という若さで亡くなっています。この熊太郎の明治七年から一二年、そして一四年の日記が残っており、彼の動向や佐賀の当時の様子などを知ることができます（島善高「川浪家所蔵 江藤熊太郎日記」『早稲田大学社会科学総合研究』六（二）、早稲田大学社会科学研究所、二〇〇五）。熊太郎は在京中に中村正直や土方久元、後藤象二郎などの著名人を訪ねたり、また副島種臣や大木喬任ら同郷の先輩を訪ねて教えを乞うたりしています。特に、副島からは時局に関する様々な助言を受けており、密接な交流を持っていたようです。この日記には実に色々な人物の名前が出てくるのですが、大隈の名前は一度も登場しません。大隈は当時佐賀の先輩格の中で最も出世した人

物です。熊太郎が大隈をどう見ていたのかが少し感じ取れるのではないでしょうか。

さらに、熊太郎が明治一四年政変直後の一月一日に佐賀の弟松次郎へ送った書翰（佐賀県立図書館寄託資料「江藤家（新作）資料」二五一九）を見てみると、大隈との距離がよりはつきりと見えてきます。

益寒氣相催候処御母様御始愈々御氣元好被遊御座大賀此事と奉存候。次に小子も無事消光罷在候間乍憚御安心被下度候。陳者先般より度々御当地之形勢御通知被下奉謝候。此後も何卒陸統御章息奉待候。扱て当地別段政談も無之、唯々役人替へあるを聞くのみ。一兩日前田中等帰県に付定而委細御承知と奉存候。武富氏も来る九日郵船より帰郷之筈に御座候。小子帰郷之儀は未だ出版之事相運はず、彼此不届にて確定不仕候。且今ま帰へれば何となく大隈の召に応じて上京せし連中と見なざる、嫌も有之に付、今少し延引之心得に御座候。然し出版の事都合よく整ひ旅費等の手当出来るに於ては直に帰県可仕候。

ご存じのとおり、明治一四年一〇月に大隈は政府から追放されてしまうわけですが、その直前、先ほど紹介した諸岡が副島から指示されて帰郷し、佐賀から武富時敏や大隈の親族を連れて上京しています。ただし彼らが東京に着いた時には国会開設の勅諭が出ており、武富たちは何もせずに佐賀に帰ったそうです（渋谷作助『武富時敏』武富時敏刊行会、一九三四）。文中に「武富氏も来る九日郵船より帰郷之筈に御座候」とあるのは、そのことを指しています。副島が武富たちを佐賀から呼び寄せて何をしようとしたのかは今も分かりませんが、熊太郎はこうした動きとは一定の距離を取ろうとしていたのです。いま帰郷すると自分も「大隈の召に応じて上京せし連中」とみなされてしまう、と。先ほどの日記と併せてみると、熊太郎はどうも大隈とは一線を画していたのではないかと考えざるを得ません。

しかし大隈と江藤家の関係は、江藤松次郎、すなわち新作の時から一変していくこととなります。

三、大隈重信と江藤新作

一 江藤新作の経歴

いくつかの人名辞典の記述に、江藤家に遺されていた新作の履歴書などで補足して、まず新作の経歴を簡単に紹介したいと思います。

新作は新平の次男で、幼名松次郎、節山という号を用いています。文久三年（一八六三）一〇月一七日に生まれました。父新平が脱藩の罪により永蟄居に処せられたと言われている時期ですので、新作も幼少時は貧しい家庭環境にあつたようです。父新平が亡くなり佐賀に戻った後は、明治一年に家永恭種が主宰する戊寅義学に入り、勉学に勤しみます。この家永は佐賀市議会初代議長で、鍋島家の菩提寺である高傳寺にお墓と顕彰碑があります。副島の撰文によるこの碑の建立に尽力したが、教え子の新作でした。その後上京して司法省法律学校に進み、同人社・東京英語学校・長崎英語学校・東京法学校などで政治学・法律学・英語を修めました。

その一方で佐賀県下における自由民権運動には、兄熊太郎と共に早い時期から参加しており、一八年二月に結成された九州改進黨にも加わっています。最初の演説ではパトリック・ヘンリーの「我に自由を与へよ、然らずんば死を与へよ」を引用して論弁したそうで、新作の演説は評判がよく、聴衆から「江藤氏後あり」の声が挙がったと言われています（上島長久「江藤新作君の生涯」鹿島櫻巷『江藤新平』代序、実業之日本社、一九二一）。父新平、兄熊太郎の衣鉢を継ぐ、そう期待されたのでしょうか。明治一八年の大阪事件では嫌疑を掛けられて拘留されており、これをきっかけに政治活動に一層奔走するようになります。

大隈家との交流が始まったのは、この事件後のことでしょう。『日本人名大辞典』（講談社、二〇〇二）の「大隈綾子」の項に、「佐賀の乱で死刑となった江藤新平の子新作をひきとって世話をし、世にだしたことで知られる」と記されています。さきほど紹介した最後の別れの回顧談を踏まえると、綾子が新作の面倒を見た理由は何となく分かるような気がします。彼女なりの新平に対する思いが、そうした行動をとらせたのではないのでしょうか。大隈家で長年働いていた光吉なお子も、「江藤さんの息子の新作さんは大隈さんの邸にずっと居られて、大隈さんの世話になって立派な人となりました。二人の間柄はとても宜しうございました」と語っています（座談会「大隈侯の家庭生活を語る」早稲田大学大隈研究室『大隈研究』第一輯、一九五二）。なお余談ですが、この座談会には、山中たけ子という女性も出席していますが、佐賀の乱で処刑された山中一郎の一人娘です。彼女は大隈からの援助もあって子どもたちは進学できたと語っています。大隈の隠れたエピソードとして、ご紹介したいと思います。

さて政治活動に奔走していた新作は、明治二七年（一八九四）の第四回衆議院総選挙で初当選しました。以後、第九回総選挙まで連続六回当選し、衆議院議員として活躍します。この間、大隈が関わった立憲革新党、進歩党、憲政党、憲政本党に所属しています。「波多野伝三郎と犬養毅の帷幄に参し」という記述があるように（大植四郎編『明治過去帳』東京美術、一九七二）、新作は憲政の神様と言われた犬養とは昵懇の関係にありました。また議員活動以外には、言論人としても活躍しています。『佐賀新聞』『肥筑日報』（のちに『西肥日報』）で論陣を張り、明治三九年（一九〇六）には『報知新聞』主筆となっています。さらなる活躍が期待されていましたが、明治四三年（一九一〇）一月六日、鎌倉長谷の自宅において肺の病によって死去します。享年四八でした。

二 同時代人による新作の評価

同時代の人々は、新作をどのように見ていたのでしょうか。黒龍会編『東亜先覚志士記伝』下（黒龍会出版部、一九三六）には、「温厚謹愨」「内に硬骨を蔵し、自ら信ずる所厚く容易に他に屈せざる」とあり、「政界稀に見るの士」と評されています。また怪庵『文士政客風聞録』（大学館、一九〇〇）には、「牢騷骯髒の氣」とあります。

次に紹介するのは、石川半山こと、石川安次郎の文章です。彼は田中正造と共に足尾銅山の公害問題に携わり、大正デモクラシーでも活躍したジャーナリストです。したがって様々な国会議員との付き合いもあり、その人となりをよく知っているわけです。彼は明治三八年に伊藤博文の娘婿である末松謙澄と同じ船に乗っていた際、次に台頭する有力な政治家は誰かと問われます。石川が衆議院議員の中から挙げたのが、江藤新作でした。

江藤は未だ十分に世間に知られて居らず、其の勢力も別に現はれて居りませんが、人物は実に立派な者であります。昨年夏五十日間、同じ満洲丸で一所に生活致しましたが、彼れの胸中には一切の私事を有せず、日夕唯国事を思ふて居る様に見えました。こう云ふ立派な人物は先輩の間にも余り多く其の例を見ません。（中略）彼れは一身の功名などを念として居ない男で、専ら天下の形勢に注意し、他日大に為す所あらんと修養して居るのです。経綸も有り学問も有り、第一人格が堅実で、真に国家を托するに足る人物ですから、御覧なさい、今に機会が来たら、江藤が大に活動して政界の一勢力となる時期が来ますから……

〔三島弥太郎子と江藤新作君〕石川半山『鳥飛兔走録』北文館、一九二二

ここに「昨年の夏五十日間、同じ満洲丸で一所に生活致しました」とあります。ただいまこの大隈記念館に大隈宛の江藤新作書翰が展示されていますが、これがちょうどこの「昨年の夏」の時のものです。新作が大隈の出発前の「高配」を感謝し、航路中の様子を報告しています。非常に貴重なものですからぜひ現物を見て頂きたいと思います。

さて石川はさらに

大隈伯爵の後継者は犬養毅君に非ず、大石正己君に非ず、実に江藤新作其人なることを指摘し、彼れにして一党の首領たるの時、其の公明正大なる人格の光明は、天下の人心を吸引すること恐らくは大隈伯爵以上ならん

と、末松に語ったと記しています。この文章は新作亡き後のものですので、最後は新作の死は「帝国の一大損失」であつたと締めくくられています。新作は、弁論や政策立案などの政治能力も長けていただけではなく、人格的にも非常に優れていたようです。

三 大隈と「江藤新作日記」

兄熊太郎が大隈と一定の距離を置いていたにも関わらず、新作が大隈、さらには綾子夫人とも交流するようになってきたきっかけや時期は、今のところ定かではありません。現存している一番古い大隈宛書翰は、冒頭に「昨日は不慮の御災難之趣」とある、大隈が爆弾を投げられた明治二年のものです（早稲田大学史資料センター編『大隈重信関係文書』第二巻一九四―一）。この時には人間関係が確立していたのでしよう。他の資料からも、明治二〇年半ばには、大隈の存在が新作の政治行動にとって非常に大きなものであつたことがうかがえます。

明治二五年（一八九二）二月、「金禄公債証書下附の議に付請願」が第四回帝国議会に提出されています。詳細は、落合弘樹「帝国議会における秩禄処分問題」（収録『明治国家と士族』吉川弘文館、二〇〇一）をご覧ください。簡単に説明いたしますと、明治政府は明治九年（一八七六）これまで士族に支給してきた家禄・賞典禄を廃止し、金禄公債証書を交付することを決定します。いわゆる秩禄処分です。しかしそれ以前に起こった佐賀・山口・熊本・福岡・長崎

各県における士族反乱に関与し、除族処分、士族の地位を失った者はこの公債を受け取れることはできませんでした。「褫祿者」と言われています。しかし明治二二年（一八八九）二月明治憲法の発布と共に大赦令が施行されて、維新以来の国事犯に対する刑罰が消滅することとなりました。そこで「褫祿者」とその関係者たちは家祿が復旧されるのだから、自分たちにも公債を下付するよう要求し始めたわけです。背景には、明治一〇年の西南戦争における除族者には、金祿公債証書が下付されており、それに対する不満があったとされています。最終的には、明治二七年に「国事に関する犯罪のため諸祿を没収せられたる者に関する法律」が施行され、佐賀の乱などに関与した「褫祿者」にも公債が下付されることとなりました。

この復祿請願運動の先頭に立って活動したのが、新作でした。彼は請願書の代表者となり、その文章の起草も行なっています。この頃の手帳の中に日記が記されており、新作の動向が明らかとなっています（星原大輔・齋藤洋子「資料翻刻 江藤新作日記（明治二四年～二五年）」『佐賀県立城本丸歴史館研究紀要』七、佐賀県立佐賀城本丸歴史館、二〇一〇）。新作は衆議院議員や貴族院議員、ジャーナリストを訪ね、復祿に関する法律が国会で成立するよう協力を依頼しています。例えば、副島種臣（板密顧問官）、岩村定高（貴族院議員）、加賀美嘉兵衛、鈴木萬次郎（以上、衆議院議員）、国民新聞社などです。加賀美と鈴木は実際に国会で賛成意見を表明しています。また新作は九州連合同志会の会合にも度々参加しています。この会の目的は民党、すなわち板垣退助の自由党と、大隈重信の立憲改進党を合同させようとするものでした。

こうした最中、新作は度々大隈邸を訪問しています。明治二五年一月二日には「午前九時頃武富（時敏）来り、共に早稲田に至る。岩村（定高）先づ在り。午後四時帰宿す」とあり、明治二五年一月二七日条には「鉄道之事及復祿一条二付話度事ありと云ふ。十時半武富と早稲田に至る。秀島家（良）（佐賀出身、早稲田大学幹事）酒井雄（三郎）

(小城出身)岩村定高等在り、加藤正之助(衆議院議員)来会」とあります。どうも大隈は新作たちの請願運動を支援し、色々な人物との仲介役を買っていたような気配があります。大隈のこうした行動の背景には、やはり佐賀の乱を「痛惜」していたという心情があったと思われます。何かしらの力になればというのが切実な気持ちであったのではないのでしょうか。こうした大隈の行動が新作の心境を変化させ、両者の距離はより接近していったのでしよう。

そして大隈が明治二十九年(一八九六)四月、二十数年振りに帰郷する際、新作はその実現のために奔走することとなります。

四 大隈の明治二十九年の帰郷

このことについてお話する前に、比較材料として、板垣退助の明治三二年(一八九九)における九州遊説に触れたと思います。板垣は大隈と共に憲政の発展に貢献したとして、国会議事堂の中央広場に銅像が建てられた人物です。なぜこれを紹介するのかというと、佐賀県下の当時の雰囲気がよく分るからです。板垣は当初、福岡の門司、博多、甘木、久留米を経て熊本を回って、そして佐賀に入る予定でした。しかし板垣は佐賀に来ませんでした。来佐中止の理由は「旧主の山内家の家扶が死去したため」と公表されています。しかし新聞紙上では、これは「ホンの口実」であって、「佐賀の人氣に畏縮する所あるより即敗走せるなり」(佐賀に於ける板垣伯の失敗)『読売新聞』一八九九年七月五日付)、あるいは松田正久が「佐賀の事情到底伯の一行を満足せしむる能はざる由を告げしかば」(板垣伯と佐賀県)『朝日新聞』一八九九年七月一〇日付)などと報じられています。

この「佐賀の人氣」の畏縮とは一体何であったのでしょうか。当時、新聞紙『西肥日報』『九州日報』に板垣を批判する記事が数多く掲載されており、憲政本党関係者が中心となって板垣来佐の反対運動を行っていたことが明らか

かにされています（中元崇智「土佐派」の明治維新観形成と『自由党史』—西郷隆盛・江藤新平像の形成過程を中心に—『明治維新研究』第六号、明治維新史学会、二〇〇九）。例えば、『佐賀新聞』には「彼の七年の役に関し伯を以て佐賀の敵なりとし、除族者始め県民一般に伯へ対する悪感情を惹起せしめ、以て伯の来遊を妨げん」（一八九九年七月一日付）と、佐賀県下で板垣批判の動きが生じていることが報道されています。また先述した松田正久の許には多くの人間が来て、板垣の来佐を止めさせるよう要求してきました。その際、彼らは「彼の狡猾なる土佐人士は我が佐賀人士終点の恨みなり。其歓迎は吾等之を地下の先輩に耻づ。貴下独り之を愧ぢざるや」と言つて詰め寄つたそうです。新平は戦いに敗れ四国へと逃れた際、高知で林有造らに会い援助を求めましたが、断られています。土佐人は苦境の新平に救いの手を差し伸べてくれなかった、そんな不満、憤りがあつたのでしょうか。さらに旧自由党系、特に土佐派の人々は当時、民撰議院建白書を提出した直後に佐賀の乱が起きたために自由民権運動の発展が阻害されたと、佐賀の乱をやや批判的に位置付けて語っていたそうです。

佐賀が旧進歩党派の拠点であるという政治的背景もある程度考慮しなければなりません、しかしこのネガティブキャンペーンの材料に佐賀の乱が用いられ、その結果、板垣が佐賀に入れなかつたという一定の成果を生み出しているわけです。ここ佐賀においては、まだまだ佐賀の乱のことは非常に繊細な問題であつたのです。とすれば、佐賀の乱との関係を取りざたされる大隈の帰郷には、様々な課題があつたことは容易に推測されます。

『朝日新聞』では、大隈到着の様子を次のように報道しています（佐賀に於ける大隈伯）『朝日新聞』一八九六年四月三日（日付）。

大隈伯は去廿五日を以て郷里佐賀に着したり。当日歓迎の盛んなりしは往年鍋島侯が帰県されし当時の事を除きては絶えてな

き盛況なりし、佐賀停車場前には椿の花と葉とを以て高四間半幅六間の歓迎門を造り、伯の通路に当る市街は毎戸国旗を掲げて其安着祝し、其他大少の彩旗は停車場の近傍に翩翩たり。(中略)干城学校の生徒は石丸大尉之を引率し、佐賀中学及各小學校生徒も教員に引率されて停車場前の両側に整列し、出迎人の総数幾万なるを知らず。

非常な盛況振りであつたことがうかがえます。佐賀から帰京した大隈重信・綾子に宛てて、新作は次のような書翰を送っています(明治二九年六月一〇日付、早稲田大学史資料センター編『大隈重信関係文書』第二卷一九四—一四)。

時下暑氣相催候処愈御清穆奉賀候。過般御帰省之折は常に不行届のみにて失礼仕候。当地御出發後到处非常之歓迎に接せられ、順路御無事着京被遊恐賀此事に御座候。右御安着祝詞、乍延引如此御座候。

ここにも「当地御出發後到处非常之歓迎に接せられ」とあり、やはり盛大な歓迎ムードにあつたことが分かります。そしてその前に「過般御帰省之折は常に不行届のみにて失礼仕候」とあることから、新作がこの帰郷に関する事前準備を色々行なっていたことは間違いありません。

この帰郷は、明治二八年に死去した母三井子の菩提を弔うためということで計画が持ち上がりました。新作は大隈と直接面会し話をしていく内に、大隈の願いが実現するよう動き始めたのではないのでしょうか。おそらく二つの目的があつたと思われます。一つは、大隈と郷里佐賀との関係修復です。維新直後に上京して以来、大隈は故郷に一度も戻ることはありませんでした。多忙であつたということもあるでしょうが、やはり佐賀の乱の影響は否定できないでしょう。そこで新作は佐賀との橋渡し役を買って出たのではないか。そしてもう一つの目的は、松方正義との会談の場を設けることです。新作はこの頃松方の郷里鹿兒島から選出された長谷場純孝とも、手紙のやり取りを頻繁に行

なっており、二人の会談の場を設けようと奔走しています。両者を提携させて大隈を政権に復帰させようと目論んでいるからです。実際、大隈は佐賀を離れた後に松方と近畿地方で会談し、これが第二次松方内閣、いわゆる松隈内閣の成立へとつながり、大隈は外務大臣として入閣することとなります。したがって、この帰郷は大隈の政治的基盤を固めるという意味もあつたと考えられます。

五 大郷里の人々との江藤新作書翰

以下、大隈の帰郷に関する史料を三点紹介したいと思います。翻刻全文を読み上げると非常に時間がかかりますので、宛先と本文中に登場する人物の紹介と、それぞれの簡単な概要のみを述べたいと思います。

一通目は明治二十九年三月一四日付の江藤新作宛武富時敏書翰です（佐賀県立図書館寄託資料「江藤家（新作）資料」五一〇）。ご存じの通り、武富は戦前活躍した政党政治家で、第一次大隈内閣では内閣書記官長を、第二次大隈内閣では通信大臣と大蔵大臣を務めています。本文中には「伯愈々佐賀へ乗り込むの日者西肥日報に伯の肖像を掲載致度。左すれば今より当地にて彫刻せしめ置かされば間に合はず候間是又賢契より其趣を御申入被下、最近の写真一枚御貰受の上迂生まで御投与奉願候」とあり、大隈歓迎の雰囲気を感じ上げるために大隈から写真一枚もらうよう依頼しています。また本書翰には、佐賀市議会議員も務めた実業家の梅崎綱吉の書翰が同封されています。彼の自宅が大隈の宿泊所の候補であつたらしく、それが可能である旨を新作と武富に伝えると共に、「洗湯場の如きは現今之儘に而差間は無之哉、或は巖風呂等相拵候方に御座候や、細大共如才なく指示被成下度希望仕候」と、細かい指示を求めています。大隈は片足を失っていますから、細心の注意が払われながら準備を進めたのでしょう。

二通目は、明治二十九年三月一七日付の江藤新作宛石井翼書翰です（佐賀県立図書館寄託資料「江藤家（新作）資料」二

二三。石井は基肄・養父・三根などの郡長を務めた人物です。「仝伯来栄に關し周旋方区々相成候而は不都合に付左記之人名接待方申合せ候間、御地之方と書取電信等之往復は此人名を御相手に被成下度候」と、佐賀側の接待役として石井と梅崎、さらに佐賀米穀取引所理事長などを務めた早田準蔵と、大隈の従弟である枚本欽之輔の名前が挙げられています。これによって、この四人が地元における大隈歓迎式の主要人物であったことが分かります。

そして三通目が、明治二九年四月二〇日付の江藤新作・武富時敏宛梅崎綱吉書翰です（佐賀県立図書館「江藤家（茂国）資料」五五九）。翌二一日に開催予定の「大隈伯来栄之件」に關する「發起人会」の案内状です。新作と武富も事前に帰郷して、大隈歓迎の準備に奔走していたことがうかがえます

このように大隈の明治二九年の帰郷の背後には、新作をはじめとする多くの佐賀県の人々の尽力があったことが知られます。他にも多くの関連史料が存在しますので、この大隈帰郷の実態についてはこれから更に明らかになっていくことと思えます。

おわりに

江藤新作はその後も大隈の側で政治活動を展開しました。石川が言うように、大隈の後継者になり得たかもしれないが、明治四三年に四八歳で亡くなります。約二年の闘病生活を経てのことでした。犬養毅がその一年前に大隈に送った書翰には「兼て御厄介相懸候江藤新作氏療養費寄付金之義」として、「閣下御承諾の五百円の残金四百円、此際御渡し被下候は、幸甚に御坐候」とあります（早稲田大学大学史資料センター編『大隈重信関係文書』第二卷一三四―四三三）。大隈をはじめ犬養たちは病氣の新作を支えようとしていたのですが、残念ながらその願いは適わなかったので

した。なお犬養は、新作の死後もその遺族たちを精神的にも金銭的にも援助していました。大隈も何かと新作の遺族を気にかけていたエピソードが江藤家の縁者に伝わっていましたので、知られていないだけで、大隈も新作の遺族を援助していたのかもしれませんが。

新作が大隈と関係を構築するに至った経緯はまだ明らかではありません。鄙見を披露するならば、新作は若い時に政治学や法律学を修めており、どうやら自分なりの憲法私案も作っていたようです。その特徴は「議院内閣制」「一院制」「普通選挙」にあると指摘されており（原田一明「江藤家所蔵の憲法草案について」『江藤新平関係文書の総合調査』所収）、大隈が明治一四年政変のきっかけとなった意見書で訴えた「政党内閣制」と近似しています。二人が追い求めようとしていた立憲制の理念がかなり近かったことも、両者の関係を結び付けたのではないかと考えています。そもそも江藤新作に関しては先行研究がほとんどなく、というよりも関係史料自体の存在が不明で、彼の言動は全くと言ってよいほどわかりませんでした。近年、その存在が明らかになってきましたので、新作は固より、地元佐賀の動向、そして大隈の実相はより鮮明になっていくことでしょう。今後の研究の発展が俟たれます。

大変拙い内容ですが、以上で私の話を終わりにさせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

（本原稿は二〇一四年度大隈祭における講演録に加筆修正を加えたものである）